新潮文庫

# 暖簾

山崎豊子著

新潮社

昭和三十五年七月十五日　発行
昭和四十二年三月二十日　十一刷

著者　山崎豊子

発行者　東京都新宿区矢来町七一
佐藤亮一

発行者　東京都新宿区矢来町七一
株式会社　新潮社
電話東京二六〇局一一一一(大代)
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

㊥　印刷・光邦印刷株式会社　製本・大進堂製本所
© by T. Yamazaki, 1960. Printed in Japan

新潮文庫

# 暖簾

山崎豊子著

新潮社版

1403

# 暖

# 簾

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

# 第一部

# 一

たった三十五銭をにぎりしめて、八田吾平は大阪へ出た。明治二十九年の三月はじめが、その日だった。日清戦争直後の好景気のさなか、故郷の淡路島では、大阪の街に金がころがっていそうな話が羨望とあきらめをもって語られていた。十五歳の吾平はじっとしておれなかった。

八十トンの機帆船で、淡路島から大阪まで十時間かかった。急に船あしが落ちると、大阪湾から河幅を狭めた安治川をさかのぼった。河岸に叢が生いたち、へし曲げられたようなトタン塀に囲まれた貧弱な工場が点在していた。煙突の煙も白い春の陽ざしの中で、黒く寒々しかった。これが村の噂話に聞いた大阪かと、吾平は少年らしく何度も瞬きをした。間もなく富島の船着場へ着いた。見渡す限りの荒れ果てた根深畑の中で、人家が浜筋にそって石ころのように疎らだった。吾平は富島から千舟橋まで歩き、そこではじめて人力車というものに乗った。船から上って食べたうどんが一杯五厘、千舟橋から花園橋までの車賃に二銭とられて驚いた。

村を出る時聞いて来た淡路島出の者を世話する口入屋は、移転してしまっていた。長堀橋の方らしいという曖昧な移転先を尋ねて二時間余りも歩き廻り、四つ橋のたもとで途方にくれて、坐り込んでしまった。人の足も、荷車も、吾平の前を妙に早く行き過ぎてしまった。川岸に並ぶ材

木置場から、木遣りが威勢よく河面にひびき、生々しい木の香が川べりの柳の枝をすりぬけて鼻をついた。濁った川の真ン中を、筏がゆっくり流れて行った。胴巻の中に残った三十二銭だけが、心細い頼りだった。

「どないしなはった」

通りすがりの年寄りが腰をかがめ、丸刈りの白髪頭を寄せて声をかけた。吾平は今までの気負いを他愛もなく失い、この年寄りにしがみつきたかった。

「大阪で奉公したい思うて淡路島から出て来よりましたけど、あてにしていた口入屋が見つからんと……」

涙声になってしまった。

「なんや淡路やて？　淡路ならお前、わいとこの出性（でしょう）（先祖の出身地）と一緒やがな」

「えっ、淡路のお人ですか」

吾平は意外な偶然に、声をあげて泣き出した。嬉しかったのだ。

「ほんまに丁稚奉公するつもりで、大阪へ出て来たんか」

と年寄りは聞いた。

「なんぞ、ボロイことでもある思うて来たんと違うか」

「違います」

「そんなら、お前どないするつもりやったんや」

吾平は言葉に詰まった。どうすればよいか解らなかった。
「どこででも働かせて下さい。お宅で置いて下さい。お願いします」
「まあ、待ちなはれ」
年寄りはそう云うと、吾平の顔をのぞき込んだ。その眼の光に思わず、吾平の足が竦んだ。
「まあえ、わいの家へ行って話しょう」
何を思ったのか、年寄りは独りうなずいて歩き出した。四つ橋から続く広い川岸の道を、吾平は年寄りに連れられて歩いて行った。鉄色の着物を着て、茶色の皮袋をさげた年寄りは、日和下駄の足もとを小幅に運んでいた。六十近い丸刈りの白髪頭の下で、一重瞼の大きな眼が、こぼっと陥ち込むようにすわっている。吾平は、時々、その眼だけが鋭い年寄りの顔を、不安げに盗み見した。
年寄りの足もとが止まった店先から、ツンと鼻をつく酸っぱい昆布の匂いがし、正面の屋根に、古木(こぼく)に金文字で『浪花屋』と浮き出した大看板が、夕陽に映えて、吾平の眼先一杯に拡がった。
「旦那はん、お帰りやす」
打水に濡れた五間間口の奥から、一斉に声がかかった。紅殻塗りの店構えの奥に、厚司を着た丁稚たちが十二、三人忙しくたち働き、小さくなって通り抜ける吾平へ、胡散臭気(うさんくさげ)な眼を浴びせかけた。店を通り越し、拭き込まれた小格子のくぐり戸を二枚ぬけて中庭を出ると、そこは、太い梁を組んだ天井の高い板敷の台所だった。だだっ広く薄暗い台所には、ランプが二つともって

いた。竈の一斗釜から白い湯気がたちのぼり、四、五人の女中が顔を赤くほてらせ、高下駄の歯をカン高くきしませて夕食の仕度をしている。ひっつめ髪で赤い襷をかけ、大きな笊一杯に沢庵をきざんだり、井戸水をどんどん汲みあげて、足もとを水だらけにしていた。小ぶりに日本髪を結いあげて奥から出て来たのは上女中らしく、下働きの女中の差し出すお膳を、ぞろりと受取り、ものも云わず大障子の向うへ消えて行った。

吾平は、台所の隅の冷たい上り框に、小一時間、置き忘れられたように待たされた。

「旦那はんと若旦那はんが、茶の間へ呼んではります」

上女中の案内で、台所の次になる茶の間の長火鉢の前へ、吾平は請じ入れられた。年寄りのそばにひやりとするような白い美しい顔だちをした旦那はんが坐っていた。

「お父はん、この子でっか、四つ橋で拾うて来はったのは」

いきなり可笑しそうに笑い、吾平の身の上話から淡路島の釣の話まで聞き出した。

「ふうん、十五か、十六にしては小さい体やけど、二十日鼠みたい賢そうな眼してるわ。よう働きよるかいな」

ひやかされているようで、肝腎の話は一向に出て来なかった。吾平は、一体、自分はどうなるのかと不安になった。

「お願いいたします。このお店で使うて下さい」

まともに、年寄りの旦那はんの顔を頼った。居眠るように小首をかたむけて二人の話を聞いて

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

いた旦那はんは、その時しゃんと吾平の顔を見すえた。

「今日は御先祖の命日や。わいの故郷から、偶然、わいを頼る者が出てきたのも、何かの因縁やろ。しっかり働いて一人前になってみい」

この日から吾平は、五代目、浪花屋利兵衛に奉公し、お為着の厚司、前垂れ、木綿の兵児帯とともに本名の吾平を改め、『吾吉』という丁稚名が与えられた。

## 二

紺に白い盲縞の普通、丁稚縞と呼ばれる厚司の背中と、前垂れの真ン中には、大黒様に因んだ打出の小槌に『なにわ』と染めぬいた紋がついていた。

お為着を着た丁稚の吾吉の仕事は、来る日も、来る日も、ランプの火屋掃除と庭掃きばかりだった。火屋掃除は午前五時に起きて、十二個のランプの火屋を板の間に並べ、竹の先に綿をくるんだぼんぼんさんで、火屋の煤をふくのだった。この仕事はまどろかしかったが、横目でこの店の商売の様子を見ているうちに、いつか吾吉の体の中にも商いのこころが芽ばえて来た。火屋掃除も商いの一つだと思いついたのである。

ある日、厠の帰りに縁側を通りかかった旦那はんの足が、何時になく止まった。

「吾吉っとん、何時みてもえらい熱心やな。お前、ランプ掃除好きか」

吾吉は、暫くうつ向いて黙っていたが、

「いえ、こんな辛気くさいこと、一向性に合え致しません。けど……、酢のきいたピカッと光った昆布の艶は、煤けたランプの光でははえ致しませんので……」

あとは顔が赤くなって、口ごもった。

「なに？」

といったきり、旦那はんは絶句した。

「えらいこと云うてくれよる」

旦那はんの捨ぜりふを聞いて吾吉はハッとした。生意気なことを云ってしまったのではないかと心配した。それから四日目、吾吉は雑役から解放されて、はじめて店へ出された。奉公してから五カ月目だった。

しかし、店に出るとは名ばかり、店の奥で昆布を入れる袋はりと、旦那はんや、番頭はんの走り使いに追われた。『吾吉っとん』と声がかかると間髪を容れず、『へーイ』と答え、用事を云いつかるまでに腰を上げて爪先だち、聞き終るや、草履をつっかけて表へ飛び出す。その機敏なこつを呑み込むまでは、ノロマ！　ドンクサイ！　と口汚く罵られた。

身丈けに余る前垂れに足をとられ、鼻の先に汗を一ぱいふき出し、焼けつくような盛夏の街を走りながら、吾吉は、今に見ておれ、えらい商売人になったると、声に出していた。淡路島の訛をなおすのにも、そんなに暇をとらなかった。間もなく大阪弁を粗忽無くしゃべれるようになり、お客の相手が許された。

黒とろろ百匁五銭、白とろろ七銭、おぼろ昆布九銭、出し昆布二銭――。吾吉の胸は躍った。商人の卵やぞォと、咽喉の奥が鳴り、

「ヘイ、毎度おおけに」

と、張りあげる声は、向いの小間物屋にまでひびいた。

店番の合い間には、支店や、別家衆へ注文の昆布を運ばされる。四つ橋や末吉橋のたもと、河岸の木蔭で、通い櫃を積んだ荷車を止め、中から昆布の一つまみを手のひらにのせて、しんめり酢を吸うた昆布の肌合いを楽しんだ。舌の上にのせると、上品はとろりと溶けて甘すっぱい。ええ品物やなあと、卸し値、加工賃、売り値を反古で綴じた手帳に写し取って、口銭がいくらあるか勘定しては、商いの勉強をした。

若旦那はんは一人息子で、病身のせいか、商売には一向、身を入れぬかわり、芸ごとは熱心で、素人浄瑠璃の名人番附は大てい二、三と下らなかった。店は六十になった親旦那はんが、いつまでもきり廻し、奉公人にもじきじき厳しい躾をした。

「浪花屋の店先の古時計と、旦那はんの顔は何時みても違てへん」

近所の人たちは、親旦那はんのことをこう云った。

或る日、吾吉が蔵から昆布を運び出す時、ほんの一つまみほどの昆布が箱からこぼれた。はっと思う間もなく、うしろから大きな手が飛んだ。耳が裂けるような暗みの中でふりかえると、旦那はんの眼が容赦なくたちふさがっていた。

「阿呆、何とぼけとおる、わいら何のおかげでごはん食べさして貰うてるのや、昆布のおかげやぜェ。そない粗末なことして大阪一の商人になれると思てんのかァ」

気をつけてみると、一日何十貫という昆布の出入りがあるにもかかわらず、店の床板に昆布の屑が落ちていることは少なかった。夜、店をしめてから掃除をする時は、旦那はんがじいっとたって見ている。昆布屑を掃き寄せるにしたがって、どうぞ、たんと屑おまへんように――と、床箒を持つ手がこわばった。はき寄せられた昆布屑は、一々丁寧に旦那はんの手でより分けられ、出し昆布や山出し昆布の一片は、たとえ一かけらでも昆布を加工する仕事場へ持って行き、とろろ昆布にかきなおしたり、油で揚げてほいろ昆布に加工して安売りした。縄屑や、ゴミは焚きものになるからと、土がまじらぬように掃き寄せねばならなかった。

大阪贅六が――と、ぬれ手に粟をつかむように、ボロ儲けすると思われていた大阪商人の蓄財の道は、一にも二にも節約、節約だった。『金儲けも一つの修業や、節約、勤勉、努力すること や』と、吾吉なりに考えついたのだった。

## 三

その頃から吾吉の銭勘定はことのほか細かくなった。船場の商家の習いで、給金はなく、小遣いとして月々貰う五銭はもちろん、二、三十銭の盆、正月の祝儀、祭のひねり紙さえ行李の底へしまい込むことにした。時々盗られへんやろかとこっそり勘定してみるほかは、一銭も手をふれ

なかった。一日(ついたち)、十五日の休みにも『丁稚の楽しみ』といわれる千日前の犬と猿の物真似芝居も見なかった。一銭の入場料が惜しかったのだ。

奉公人たちは、店をしめてからも、すぐ寝床に入らず、夜更けの町へ出かけた。新町橋東詰めから丼池(どぶいけ)筋へかけて、七の日に出る順慶町の夜店や、食べもの屋の沢山出る平野町の夜店まで足を延ばすのだと嘘をついては、橋一つ距てた向うの新町の廓へ遊びに行った。帰って来ると、朋輩たちは蒲団の上で腹這い、豆板や、いか焼き、ドラ焼きを、ピチャピチャ、舌を鳴らして食べ、あげくのはて、頭から蒲団をかぶって聞えよがしに猥談した。

「吾吉っとんには出来へんこっちゃなあ、しぶちん（吝嗇）やさかい」

何がしぶちんや、今に見とれと、吾吉は歯をくいしばった。そんな時いつも吾吉は行李の底へしまい込んでいる貯金の額が眼先にちらついて、寝つかれなかった。

その年も暮れに近づき、お煮〆め用の『出し昆布』、お供え餅の上にかける『白いた昆布』、梅湯にそえる『むすび昆布』の売行きが多くなった。特に『白いた昆布』は極く上等の平(ひら)昆布を芯の真白な地肌が見えるまで丹念にけずった品の良い、お餅とともに縁起を祝うもの。これが昆布屋の店先にたらりと並べば、師走の町も、ああ、お正月まで四、五日やと、急に気ぜわしくなる。

日々の労働は、ますます激しくなった。朝五時に起き、店じまいが夜の十一時、お風呂を戴いて寝床に入るのが十二時、若い吾吉にも、これは辛かった。手には、ざくろのようなあかぎれをつくってしまった。その手で固い帯のような出し昆布を三つに折って、五十匁ずつしで紐でくく

る。バリッと昆布を折りたたむ度に、肉の割れ目が血をにじませて疼いた。しで紐がしゅっと指先をしごいたとたん、体ごと火の気のない板の間で飛び上った。

激しい指先の痛みで、吾吉は出し昆布のくくりを続けることが出来なかった。奉公は辛いもんやと聞いていたが――と、吾吉は涙をにじませ、あわてて便所へ飛び込んだ。女便所でしゃがんだまま、息を殺して泣いた。両手のあかぎれの甲に涙がひりひりとしみた。

「吾吉っとん！　何してなはんねん」

素頓狂な女中の大声に、吾吉は、はっとした。吾吉は便所の中で寝ていたのだった。誰が告げたのか、朋輩の笑い声のうしろから、

「吾吉！　ちょっと来い」

けわしい旦那はんの声が、つっ走った。台所の板の間の前にひき据えられたが、何のいいわけもなく、吾吉は恥ずかしかった。

「裸になって漆喰に手ついてあやまりィ」

「へェ」

厚司を脱いで真裸になり、台所のたたきへ坐って手をついた吾吉の頭の上から、いきなりバケツの水が二、三杯ぶっかけられた。全身が凍りついて、そのまま漆喰に貼りついてしまいそうだった。

「眼ェ覚めたか、あと風邪ひきなや」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com